

# 一一〇一九年度・学力考查問題【国語】

(中学第二回)

## 注 意

- 一、試験時間は50分です。
- 二、答えはすべて解答用紙にはつきりと記入しなさい。
- 三、解答用紙のみ試験終了後集めます。
- 四、問題は11ページで一・二の二題あります。開始の合図で必ず確認し、そろつていない場合にはすぐに手をあげなさい。
- 五、本文の表現については、作品を尊重し、そのままにしてありますが、設問の都合上、省略した部分、表記を改めた部分があります。  
また、特に指示のないかぎり、句読点等も一字に數えます。

―― 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えなさい。

敬太郎の一日は、毎朝、七時二十十分にはじまる。

寝ぼけまなこをこすりながら目覚まし時計を止め、服を着がえて、かばんの中身をチェック。準備をすましたころには、父親の定番メニュー、目玉焼きのせトーストが完成している。敬太郎がそれを半分かじつたあたりで、弟の祐次郎<sup>ゆうじろう</sup>が起きだしてくる。仕事で夜がおそい母親だけがまだ寝ている。

この朝の光景は四月から変わっていない。

ひとつだけ、この夏から、敬太郎には新たな習慣が加わった。

一枚目のトーストをかじりながら新聞をめくる、というものだ。二枚目のトーストをかじりながら新聞をめくる、といふものだ。敬太郎がめくるのは、世界の「いま」が報じられている紙面だけ。いつ聞いても、そこにはたくさんの悲劇がある。内戦、飢餓、疫病、殺人。来る日も来る日も、世界のどこかでとてつもなくひどいことが起こり、だれかが犠牲になっている。

「そういうこと、日本にいるとピンとこないけど、現実は現実だし、ちゃんと知らなきやつて思うんだよね。新聞って、そのためにあるんだし」

約二ヶ月前、<sup>1</sup>そう言つて敬太郎をぎよつさせたのは、ヒロだった。

新聞つて、大人が読むものじゃなかつたのか。  
びっくり仰天しながらも、敬太郎はヒロに言つた。

「けどさ、知つても、なんにもできないよね。世界のどこかで悲しいことが起こつてゐるつてわかつても、ぼくたちまだ中学生だし、なんの力もないし」

「そりなんだよ。なんにもできないんだ」  
力をこめてうなずいたあと、ヒロは長いまつげをパチパチさせて、はずかしそうに言いそえた。

「それでもぼく、やっぱり、悲しいことを悲しむつて、大事だと思う」  
敬太郎が毎日、新聞を読むようになったのは、それからだ。

本人を前には言えないけれど、敬太郎はつねづね、ヒロのことをたいしたヤツだと尊敬している。頭がよくて、スポーツができて、顔もイケていて、ふつうの中学生が考へないようなことを考へていて、なに、少しもいばらない。欠点がない。

いや——ひとつあるとしたら、「けつこう、めんどくさい」ってところかもしれない。

「行つてきます」

寝室の母親にひと声かけて、その日も、敬太郎は八時ちょうどに家を出た。

敬太郎の家から北見二中までは徒歩二十分。とちゅう、交通量の多い大通りをわたる。そのむこう側の信号の下で、毎朝、ヒロと落ちあう。

はつきり約束をしたわけでもないのに、いつのまにか、ヒロの部活の朝練がない日はいつしょに登校するようになつていた。

「おはよう」  
「おはよう」

朝日をあびたヒロの笑顔は、いつ見てもさわやかだ。光のつぶつぶをちりばめた瞳<sup>ひとみ</sup>。さくら色に染まつたほお。女子たちがぼうつとなるのもうなずける。

しかし、ふたりならんで歩きはじめるなり、ヒロの口からはたいて

い、顔とは裏腹の暗い声がこぼれてくるのだった。

「あのさ、敬太郎。タボのことなんだけど」

どうやら、今日はタボらしい。

「タボって、北小出身でも原小出身でもないじやない。それって、うちのクラスじゃタボだけなんだよね。で、考えてみるとぼく、タボがどうから来たのかも知らなくて……最初の自己紹介のときも、タボ、小学校の名前とか言わなかつたでしょ」

「そうだっけ？」

「そうだよ。それでぼく、思いきつてタボに聞いてみたんだよね。うちの中学に来る前はどこにいたの、つて。けどあいつ、へらへら笑つてごまかすばつかで、答えないんだ」

「ふうん。けど、タボって学校の真横に住んでんだよね」

「そう、あの白いマンション。なのに、原小じやないんだよ。つてことは、かなり最近、越してきたつてことだと思うんだけど」

「藤田先生なら知つてんじやないの」

「ぼくもそう思つて聞いてみたんだけど、藤田先生も、本人が言わないとあるのかなあ」

はたしてタボはどこから来たのか。なぜそれを隠すのか。さほど親しいわけでもないタボのことで、ヒロは真剣に頭をなやませている。

これは毎度のことだつた。ヒロの口からため息がもれない朝はない。タボにかぎらず、一年A組のみんなのことが、ヒロには気になつてしまふのがないのだ。

理由があいまいな不登校を続いている田町<sup>たまち</sup>。

気に入らないことがあるとすぐにキレて教室を飛びだす近藤<sup>こんどう</sup>。

美化委員の仕事をなにもせず、そもそも自分自身が不潔すぎるイタル。

これまでヒロをなやませてきたクラスメイトは数知れない。一年A組を引っかきまわす問題児たちのために、なんでいちいちヒロがやきもきしなきやならないのか？

前に敬太郎がその疑問をぶつけたところ、ヒロの答えは明快だつた。「だつてぼく、クラス委員長だから。クラスの平和を守るのが役目だし、みんなをまとめる責任があるし。つて言つても、田町さんが不登校してゐる時点で、もう委員長失格かもしれないけどね」

いまだかつて、こんなにも使命感に燃えたクラス委員長がいただろうか？

<sup>2</sup> やっぱりがうなあ、と敬太郎はあらためてヒロを見なおした反面、やっぱめんどくさいとこあるよなあ、と心のすみつけだつぶやきもしだた。

一年A組でなにかが起ころるたび、ヒロはまるで自分の落としものみたいに、それを拾つてせおいこむ。その重さに、いつもふうふう言つてゐる。それでいて、クラスメイトたちにはその汗や息ぎれを見せようとしている。

そう、ヒロが暗い声で心配事を語るのは、敬太郎にだけ。ほかのみ

んなの前ではかつこつてているのか、いつもにこやかで涼しげなクラス委員長をよそおつてているのだ。

北見二中の校門をくぐり、教室が近づいてくるにつれ、だから、ヒロの口数はへる。心なしか背筋もしゃんとして、いつ、だれに「おはよう」と声をかけられても、即座に笑顔を返すための態勢が整えられていく。

完全なる変身をはたすのは、一年A組に到着したときだ。

<sup>3</sup> 教室の戸に手をかけてから、ヒロはいつも一拍おいて足もとを見おろし、ふう、と小さく息をつく。それから、ひと思いにがらりと戸を開く。

「おはよう」

王子さまのおなり、とばかりの満面の笑み。

「あ、ヒロだ。おはよう」

「おっす」「ヒロくん、おはよ」

教室のあちこちから飛んでくる声に、ヒロはいちいち「おはよう」「おはよう」と返しながら、自分の席へと進む。まるできらやかな光の帯でも引いていくように。さあみんな、この教室にたりなかつた朝日をぼくがつれてきたよ、とでも言いたげに。ところが――。

<sup>4</sup> この日は、どちらうでその光がかげつた。

窓ぎわの席をめざして、いたヒロの足が止まる。それきり、つぎの一歩が進まない。立ちつくす後ろ姿から動搖が伝わってくる。

なにがあつたのか？

ヒロの視線を追いかけた敬太郎は、前から二列目にいる小西美奈に

気づいて、ハツとした。

美奈の髪が十円玉みたいな茶色に染まっていた。

約二週間ほど前から親友の山形ゆうかとはなれ、いつもひとりでいるようになつた小西美奈の異変。これはたぶん、いやきっと、確実に、めんどくさいことになる。

<sup>5</sup> 敬太郎の予感は的中した。その朝、ホームルームのあとで美奈が職員室へ呼ばれると、ヒロは早速、藤田先生になにを話したのかさぐりを入れに行つた。以降、一日中、ヒロのため息がやむことはなかつた。

「藤田先生が言うにはさ、小西さん、山形さんとのことだけじゃなくて、ほかにもいろいろ抱えてるみたいで、いまはヤケになつてんじやないかつて。けど、なにがあつたのか聞いても、言わないんだつて。山形さんとケンカした理由もわかんない」

「藤田先生は小西さんのこと、芯の強い子だからだいじょうぶとか、髪をもとにもどすつて約束したとか言つてるけど、どうだかなあ。藤田先生つて、基本、前むきでいい人なんだけど、生徒もみんな前をむいてるはずだつて思いこんでるふしもあるよね」

「ぼくは小西さん、だいじょうぶじゃない気がするんだよね。山形さんのほうはさ、小西さんと決裂してからも、相棒さんたちにくつついでうまくやつてゐたみたいだけど、小西さんは逆に孤立しちゃつてていうか、みんなを拒否してゐる感じだし。それにこの前、小西さんが二年生の不良たちといつしょにいるところ、真琴が見かけたつて言つたし」

気にしはじめるときとん気にする。出口のない堂々めぐりをや

められない。そんなヒロの姿は決してめずらしくない。

めずらしいのは、<sup>6</sup>今回にかぎって、敬太郎の胸にふつふつといらだちがわいてきたことだった。この日の敬太郎はほどほどに聞いたり、聞かなかつたりと、いつものようにおおらかにうけ流すことができなかつた。

小西美奈は一年A組で唯一、敬太郎がどうしても好きになれないクラスメイトなのだ。いかにも頭が軽そうで、いつもムダに騒いでいるし、口も悪い。平気で人を傷つけることを言う。敬太郎も以前、みんなの前で「あんたつて、ヒロの金魚のフンだよね」と侮辱<sup>ぶじょく</sup>されたことがあつた。あんな子のために気をもんでいるヒロの気が知れない。いや——よくよく聞いてみると、ヒロは美奈のためだけに気をもんでいるわけでもなさそうで、それもまた敬太郎をイラッとするのだった。

「なんかこのごろ、どんどん、A組とB組に差がついてきちゃつた気がするんだよね。B組は担任がこわいから、基本、みんなちゃんとしてるじゃない。A組だけだよ、不登校とか、脱色とか、机がくさいとか。こういうのも、やっぱり、クラス委員長の責任つてことになるのかなあ」

「最近、久保さんによく言われるんだよね、もつとしつかりクラスをまとめてくれつて。なんかもう、イタルがおならしてもぼくのせいみたいに言われちゃつてさ。ただでさえ風あたりきびしいのに、これで小西さんがグレちゃつたりしたら、もう……」

「B組の小川なんかさ、あいつ、<sup>※1</sup>内申書のためにクラス委員長やつてるつて、塾でどうどうと言つてんだぜ。クラスのことなんかなんも考

えてないんだ。けど委員長の実績としては、やっぱり、ぼくより小川のほうが上つて思われてんだよなあ。このままじゃぼく、後期の再選はむずかしいかもしれない」

午前中の授業が終わり、給食が終わり、昼休みが終わつて五時限目のある理科室へ移動しても、ヒロのめんどくささには歯止めがかからなかつた。

磁石を使った実験中も、鉄粉の模様をデッサンしていた敬太郎にぴたつとよりそい、耳もとでぶつぶつとぼやきつづける。

あまりにもくつくものだから、ヒロのひじがうでにあたつて、手もとがくるつた。おかげで、ノートの上にびよーんと、いらない線がのびてしまつた。

「あー、もう」

中学入以来、はじめて、敬太郎はヒロに怒つた。

「もういいよ、ヒロ」

「え」

「もう聞きたくないよ」

「え」

「なんだかんだ言つてさ、ヒロは結局、自分のことが一番心配なんじゃないの」

「え」

「プライドとか、メンボクとか、そういうことなんじやないの」

え、と聞きかえされるたびに声が高まり、最後はうわずつたような音が出た。

「おいそこ、私語、うるさいぞ、敬太郎」

たちまち、先生から叱咤<sup>\*2</sup>の声が飛ぶ。しのび声でしゃべりつづけていたのはヒロなのに、しかられるのは敬太郎だけ。いつもこうだ、と敬太郎は思う。

(森絵都『クラスメイツ〈前期〉』偕成社より)

※1 内申書<sup>ないしんしょ</sup>：入学試験の参考資料になる卒業校から進学希望校にあてて提出される書類。

※2 叱咤<sup>しつた</sup>：はげまし。

問一 線a「芯の強い」・b「おおらかに」とあります、本文における意味として最も適当なものを次のなかからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

a 芯の強い

- ア 精神的にしつかりしている
- イ 正しいことを理解している
- ウ 心身ともに健全である
- エ 何事も積極的に取り組む

- b おおらかに
- ア 他者の発言や行動を素直に受け入れない様子で
  - イ 物事にこだわりがなくいつもある様子で
  - ウ ゆつたりとして細かいことにとらわれない様子で
  - エ 相手の調子に合わせて落ち着いている様子で

問二 線1「そう言つて敬太郎をぎょっとさせた」とあります  
が、この時の「敬太郎」の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 優等生のヒロが、まだ中学生でありながら外国の人々にまで思いをはせていることに対する感動。

イ 二か月前から新聞に目を通すことを日課にし始めたばかりだったので、同じ取り組みをするヒロに対するねたみ。

ウ できることが限られている中学生ながらも、海外の出来事に関わろうと大人ぶるヒロに対する軽べつ。

エ 子どもでありながら世界の現実を知ろうとして、大人の読み物である新聞を読むヒロに対する驚き。

問三 線2「やっぱめんどくさい」「つぶやきもした」とあります

が、この時の「敬太郎」の心情の説明として最も適当なものを次のなかから選び、記号で答えなさい。

- ア 勉強やスポーツだけでなく人間性も兼ね備えているヒロは一見完璧に見えるが、親友の敬太郎から見ると大したことはないと感じている。

- イ クラス全体を気にかけているヒロの話そのものに堅苦しいところがある上に、ヒロの苦労を聞かされることにも負担を感じている。
- ウ 登校中にヒロがクラス委員長の仕事への不満ばかり口にするため、聞かされている敬太郎にとつては不快であることが多いと感じている。

エ 何事も人並み以上にこなすヒロと一緒にいると、ヒロに原因があることも敬太郎の責任にされてしまうので、損をすることが多いと感じている。

問四 線3 「教室の戸に～小さく息をつく」とありますか、

この時の「ヒロ」の様子を「敬太郎」はどのようにとらえていますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア これからクラス委員長としてふさわしい人物像を作り上げるために、心の準備をしている。

イ クラス委員長としての力不足を実感し、後期の選挙で再選できるか不安を感じている。

ウ これから始まる今日一日の楽しい学校生活を想像して、期待に胸をふくらませている。

エ クラス委員長としての自分の努力をいつも台無しにしてしまった同級生たちに失望している。

問五 線4 「どちらでその光がかけた」とありますが、この時の「敬太郎」の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 委員長として満足できる状態だったクラスで、問題を引き起こす美奈に失望している。

イ いつまでも成長せずに、常にクラスの雰囲気を壊してしまった美奈に怒りを抱いている。

ウ 委員長として明るく振舞っていたが、思いがけない美奈の姿に心をかき乱されている。

エ 存在感のある委員長の自分以上にクラスの注目を集めている美奈に嫉妬を感じている。

問六 線5 「敬太郎の予感は的中した」とありますが、それはどのようなことですか。その内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 新たな問題をヒロが抱え込むことで、自分も巻き込まれてしまふという心配のとおりになつた、ということ。

イ ヒロが先生に相談したことで、クラスの不満が高まり、敬太郎もいつしょに責められてしまった、ということ。

ウ 美奈が他学年との間で問題を起こしたため、敬太郎もヒロの不満を聞かされる形で被害を受けた、ということ。

エ 目立つ存在だった美奈が、上級生の不良たちとつながってトラブルを起こすのは予想できた、ということ。

問七 線6 「今回にかぎって～ことだった」とありますが、この表現には「敬太郎」が「美奈」を「どうしても好きになれない」という理由の他にどのような理由が読み取れますか。わかりやすく説明しなさい。

## ―― 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

読者の皆さんお読みの方は驚かれるかもしないが、歴史おとぎを知るための貴重な手がかりおもいじょである古文書は、日々日本のどこかで廃棄はいきされ続けている。

なぜ、誰が、貴重な歴史資料を、と思われるかもしない。が、捨てる現場で古文書を見れば、それはありふれた古い紙くずとしか見えないものであり、ネズミの巣くつた汚い古簞笥ふるだんすいの中から見つかったシワくちやのボロ紙だつたり、暗く湿つた土蔵つるわらの中から出てきたカビ臭い紙の束だつたりする。だからそれを「貴重な歴史資料」と認識するのは難しいかもしれない。こうして日本全国のどこかで、おそらくは毎日のように、先代の遺品が整理され、古い家が建て替えられ、土蔵が解体されるとともに、中の古文書はしょぶんあわせこねるされていくことになる。

※2ふるえむら 村に限らず、都市近郊きんこうでも、古民家があつたり土蔵が残つてている地域には、たいてい何ほどの古文書は残つていて。家の仏壇ぶつだんの中に、屋根裏の木箱の中に、土蔵の古簞笥の抽斗ひきだしの中に、古文書は眠つていることが多い。また神社やお寺の片隅かたすみに、木箱に入った墨書きすみの書類がひつそりと残されていることもある。そうした古文書の一点一点が、一度失われてしまつたらもう二度とは目にすることのできない、復活させることのできない貴重な歴史解明の手がかりである。何も「貴重な歴史資料」※3は表装された姿で桐箱きりばこに収まっているものばかりではなく、資料館や博物館の棚にきちんと整理されて並べられているものばかりでもない。あるいはまた豊臣秀吉や坂本龍馬など天下を動かし

た有名人の書いたものばかりが大切なのではない。むしろ圧倒的多数の古文書は、地域の歴史を解き明かす貴重な「地域史料」として、ありふれた民家や寺院や公民館の中に眠つてゐる。歴史の素材は意外に身近にあるのである。

一方、世は歴史ブームである。大きな書店には、必ず歴史書のコーナーが設けられている。町の本屋でも、漫画や小説まで含めれば、歴史に関する書物が置かれていないことは、まずない。「織田信長の人心掌握術」とか「徳川家康の経営戦略」など歴史上の英雄に範をとつたようなビジネス雑誌の類を目にのししばしばである。ゲームの世界でも歴史物は人気のジャンルである。娯楽の一種として消費される「歴史」は世の中に溢あふれている。また、ノンフィクションの歴史書も数多く出版されている。大手出版社によるシリーズものの「日本の歴史」は幾度も企画・かんこうされてきているし、そもそも歴史教科書はノンフィクションのだいひょう格であり、小中学生は必ず歴史を教わることになつていて。高校生も世界史はひつしゅうであるし、日本史を学ぶ機会も多い。こうしてみると、Aは誰もが接することのできる、そして書店や図書館にいけば必ず書物のあるポピュラーな分野2といふことができる。

では、民家や地域のお寺などに残された「意外に身近にある歴史の手がかり」は、教科書やテレビで見るような「ポピュラーな歴史」と結びついて歴史を身近なものにしているであろうか。答えは否である。人気のあるポピュラーな歴史の大半は天下国家の動きを記した、いわば「大文字の歴史」や「英雄の歴史」である。それとわが家・わが地区の煤すすけた書類とはなかなか結びつかない。しかし日本史の研究、と

くに江戸時代の研究は、実はほとんどがそのような個人宅や小さな寺院・神社、あるいは地区（区）に伝わる古文書を素材に研究され、描き出されてきたのである。江戸時代以外の時代についても、その土地の民家や寺社に残る多くの古文書が重要な役割<sup>4</sup>を果たしてきた。決して「身近な古文書」は歴史研究と無縁<sup>5</sup>ではないし、それどころか地域に残されてきた古文書が地域の歴史や、場合によつては日本の歴史を解明するかけがえのない手がかりになつてきたのである。

それでも、「身近な古文書」が活字で出版されているような歴史の研究とつなげてイメージされないのは、そもそも古文書がどのように研究結果に結びついていくものなのか、歴史家がどのように素材としての古文書を利用しているのか、その点がまったく知られていないことが大きな理由ではないだろうか。歴史研究者の営為も、古文書など歴史資料の大切さも、意外なほどに世間には知られていない。考えてみれば、研究結果を著した書籍<sup>6</sup>はいくらでも書店に溢れているが、実際に歴史家がどのように素材を集め、研究していくか、その過程や舞台裏を記した本は見かけない。まして歴史研究の素材となる史料の身近さや大切さ、そして誰によってどのように史料は見出され、整理され、分析の素材となつていくかについて認識を深める機会はほとんどないといつてもいい。それは同時に身近にある史料の価値について知る機会がないことをも意味している。

天下国家の大文字の歴史ももちろん大切であるが、どの時代についても、教科書に書かれているような簡単なまとめ括られるほど日本は一元化されているわけではない。飛行機で簡単に全国を飛び回ること

ができる、テレビを通じてリアルタイムで全国のニュースが見られる現代ですら、地域の言語・風俗・習慣・文化は決して一元化されることがなく、それぞれの個性を放っている。旅が楽しいのは、当然ながらそうした違いや個性があるからである。ましてや交通も通信も今ほど発達していなかつた時代、「一つの日本」のように見えながら実は無数の地域の個性が寄り集まつた形で日本が成り立つていたことは確かであろう。こうした地域の多様性こそが日本という国を構成し、動かしてきたのである。そして地域の個性を表現し、今に伝える素材こそが、地域に残る歴史的史料なのである。大文字の歴史ばかりが人々の中では歴史そのものとしてイメージされがちであるが、それは誤りであるばかりでなく、<sup>7</sup> そうした理解は、歴史を自らの今の人生とは無縁な異世界のフィクションに追いやつてしまふことにもつながる。もちろん英雄の活躍や歴史のスペクタクルを楽しむことを否定はしないが、歴史はそのような皮相なエンターテイメントとして消費されるばかりのものではないことを知つてほしい。

では、エンターテイメント以外に、歴史を知ることにはどんな意味があるのだろうか。そこにある大きな意味は、正確な過去をきちんと知り、認識すること、それが今とこれからを生きる私たちがどう歩むべきかを決める唯一の手がかりになる、ということである。過去の成功や過ちを正確に認識することが、よりよい未来を選択する判断材料となる。人間は未来を知り得ない。だから過ちも犯す。しかし、未来に対しても私たちが何も手がかりをもつていなかといえど、そうではない。私たちは膨大な過去を遺産としてもつてゐる。過去を知ること

で、できるだけ過ちの少ない未来を選択することができる。歴史学はその過去の解明に貢献する学問である。そして過去を解き明かすための最大の資料が、俗にいう「**B**」である。

歴史研究者は古文書を主たる素材として分析し、研究を進める。私はその古文書の整理と研究という地味な仕事を、仲間とともに長く続けてきたが、それは縁あって出会った地域の史料をきちんと整理し、後世に残していくことが、必ずやその地域のために、また広くは日本の歴史全体を考えるために、また広くは日本とあつた。本当の意味での等身大の歴史は、今ふみしめている自身の足下にこそある。地域地域の歴史、つまりそれぞれの人が地元の歴史を大切にしていくことが、歴史に対する見方を真に鍛えることになる。それが全体史を批判的に捉え、その誤りを正し、より正確な歴史像を築いていくことにもつながる。等身大の歴史こそが本当の意味での歴史学の出発点になる。その意味では、地域に埋もれる古文書を掘り起し、読み込むことは、曖昧に語られる全体史をただ知識として知ることよりも大きな意義をもつ。歴史は決して等身大の自分と離れたところにあるものではなく、まさに地域の現場に私たちとともにあるのだから。

(白水智『古文書はいかに歴史を描くのか』NHK出版より)

※1 土蔵……  
土壁の倉庫。

※2 栄村：長野県最北部に位置する村。三・一東日本大震災の

翌日震度六強の地震で大被害を受け、多くの古文書も失われた。しかしその報道はほとんどなく、栄村の震災は「忘られた震災」とまで呼ばれている。

※3 表装：書画類を掛け軸や額などに仕立てられたり修復されたりすること。ここでは歴史資料を保存や鑑賞のためにきれいに整えること。

※4 ノンフィクション：事実に即した作品。これに対してフィクションは作り話。

※5 リアルタイムで：同時に。

※6 スペクタクル：見た目に大がかりで強い印象を与える見せ物。皮相なエンターテイメント：ただ面白いだけで内容の薄いもの。

問一 線**A**～**B**のひらがなを漢字に直しなさい。

問二 線1「歴史を知るための～廃棄され続けている」とあります。その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- A 先祖はもとより日本の歴史すら関心を持たれていないから。  
B 身近にあるものが貴重な歴史資料であるとは思わないから。  
C 重要なものはすでに資料館や博物館に収められているから。  
D 歴史上の英雄について書かれたものにこそ価値があるから。

問三 **A**・**B**に入る適当な言葉の組み合わせを次の中から選び、記号で答えなさい。

- A A 文化 B 遺産  
イ A 読書 B 歴史書  
ウ A 過去 B 歴史像  
エ A 歴史 B 古文書

問四 —— 線2 「民家や地域の（ ）答えは否である」とあります、

その理由として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 一般の人には、歴史といふものと近所や自宅などにある書類との間に関連があるという認識がないから。

イ 日本史を中心とする歴史の研究者は、個人的・地域的な研究にとどまるのみだから。

ウ 一般の人々は、大文字の歴史より古文書のほうこそが歴史的に価値があると知っているから。

エ 歴史の研究者たちも、その土地の民家や寺社に残る古文書が重要な役割を果たしてきたことを知らないから。

## 問五 —— 線3 「大文字の歴史」について。

(1) その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア まだ教科書などには書かれていない秘められた歴史。

イ その地域で古くから語りつがれている郷土の歴史。

ウ 一般に知られている天下国家の流れを述べた歴史。

エ 重要だがまだ一部の歴史研究者しか知らない歴史。

(2) これと反対の意味で用いられている言葉を文中からさがし、抜き出しなさい。

問六 —— 線4 「重要な役割」とありますが、それはなぜ重要なのですか。文中の言葉を用いて三十～四十字で説明しなさい。

ア 歴史の研究結果を著した書物がすでに大量に書店に並んでいて人目を引かなくなっているから。

イ 歴史家の素材収集や研究過程を記したものは一般的にふれないのであるから。

ウ どのように素材を発掘はつきつし研究対象としているかを知る機会はほとんどないから。

エ 近所や自宅にある歴史素材に史的価値があることに気づくきっかけを持つことができないから。

問八　——線7 「そうした理解は、／＼つながる」とあります、  
その説明として最も適当なものを次のの中から選び、記号で答えな  
さい。

ア 地域の個性を表現し、今に伝える素材こそが地域に残る歴  
史的資料だとすることは、歴史がどのようなものであるかに  
ついての認識が不明確になりかねない、ということ。

イ 身近な歴史を大文字の歴史に結び付けていくことにより、  
地域の歴史こそが自分たちの歴史だと誤って認識するようにな  
る、ということ。

ウ 世間に良く知られている歴史を自分たちの歴史だと思い込  
むことにより、人々にとつての人生は作り話に満ちたものと  
なり、現実味を持つて生きられなくなる、ということ。

エ 大文字の歴史が歴史そのものだと思い込むことは、歴史の  
存在を今の自分の人生に何ももたらさないものだと捉えさせ  
て遠ざけることになりかねない、ということ。

問九 本文全体をふまえて、筆者の考えに合っているものを次のなか  
ら選び、記号で答えなさい。

ア 古文書が失われていく現状への対策として、研究者たちの  
意識を高めて、古いものを大切にすることが必要である。

イ 人知れず消えつつある歴史の資料こそが、歴史の見方をよ  
り確かなものにしていくための手がかりとなる。

ウ 今学校に期待される古文書読解のための教育こそが、真の  
歴史学研究のための第一歩である。

工 「歴史書ブーム」が起こった背景には、古文書に対する意  
識の高まりがある。

# 〔国語〕

## 解答用紙（中学第二回）

問  
一

b

問  
二

問  
三

受験番号

氏名

得点

問  
七

問  
四

問  
五

問  
六



## 中学校第2回入試（国語）における問題ミスについて

二の問題文の傍線6に対応する設問がありませんでした。この件に関して、特に得点に影響するものではないとの判断の上、解答例どおりに採点いたしました。

